

## 2. 遠い友人：ワレリー レガソフの思い出

太 田 時 男

横浜国立大学長

IAHE理事

国際水素エネルギー協会（IAHE）のソ連代表理事であり、モスクワでの第7回世界水素エネルギー会議（7th WHEC）の副議長を務めることになっていたワレリー レガソフ（Valeriy A. Legasov）は筆者の数少ないソ連の友人の1人であった。チェルノブイリ原発の事故の事後処理の責任者としての過酷な仕事にも負けず、またワルチャトフ原子エネルギー研究所の所長というソ連体制側の学者でありながら、ソ連の原発管理体制のずさんさを、幾度びも鋭く批判し続けた良心と勇気を持ち続けた。

然し、4月30日のタス通信はレガソフが27日死去したことを報じ、5月12日のロイター通信はソ連当局の発表として彼の死は自殺であったことを伝えた。52才であった。



再びは相見ることなき友人レガソフと筆者との間に水素エネルギーを通し、どんな出来事があったのだろうか。

### 1. 1st WHECでの出会い

第1回のWHECは1976年3月1日から4日間マイアミのコナパーホテルで開かれた。初日の夜

は会議々長のベゼログルーの私邸へ各国代表が招待され夕食を共にした。その時、私より10才年下のレガソフに初めて会った。私が最初の学問を通じての日本人だというので非常に親愛の情を示し、お互いに不自由な英語で話に花を咲かせたものである。だが、会話には、ぴったりとつき添っていたソ連内務省の役人が我々の会話に陰影を投げかけていたのが印象的であった。

写真は3月2日のコンフェランス パンケットのメイン テーブルのスナップである。向って左端が筆者で時計の針廻りで、次に見えるのかベゼログルー夫人、次がソ連の役人、その隣りの荒い縞模様の背広を着た人がレガソフで、思えば当時40才であった。その横がマルケッティ、1人おいてゼイフリッツ（スイス、2nd WHEC議長）である。

レガソフとの出会いは、純朴という強い印象で包まれ、これが彼への私の信頼感に生れ変っていったのである。

## 2. 3rd WHECとソ連のアフガニスタン侵入

第3回のWHECは1980年6月23日より4日間、東京の京王プラザホテルで開催された。筆者が議長を務めたが、この会議中ソ連の参加問題が心を痛めた最大のトラブルであった。

周知のようにこの年の春、ソ連軍はアフガニスタンに突然大軍を送って制圧し、反ソ連派の政治家を軍靴で蹴散らし去ったのである。これに対して、西欧、アメリカ、日本らの自由諸国は様々なソ連への制裁措置を取り、官使の入国制限などを行った。モスクワオリンピックのボイコットはその最たるものであった。

この外交的な事変が科学・技術上のイベントである3rd WHECにも暗い影を落した。

6月3日ソ連の日本大使館へ13名のソ連科学者が3rd WHECへの参加申請をし、外務省は私へ身許引受けを打診してきたのである。勿論、異議のあろう筈はなく「原則的OK」の返事を取敢えず発し、直ちに申請者の名簿を送るよう申し入れた。

さて、申請者の名簿を見て、がく然としたのである。レガソフは入っていないし、論文発表者の名前が、誰一人見当たらないのである。すっかり考えこんでしまった私は、最終的返事を放置しておいたのである。アフガン侵入へのいきどおりと不信感も手伝ってのことであった。

会議の初日の23日、ソ連の科学アカデミーとレガソフ個人から、私あて緊急電でWHEC参加を認めるよう要請があり、レガソフがそのように頼むならと早速OKを出した。然し、今度は外務省はアフガン事件の措置の一環としてビザ発給に故意と思える異常な時間をかけ、ビザが出されたのはWHEC最終日になってしまったのである。

結局、ソ連からは1人の参加も実現しなかった。これについて私は特に、Int.Jr.Hydrogen Energy Vol.7,P.95(1982)に声明を出し、レガソフを初めとするソ連の水素エネルギー研究者にお詫びし、外交政策が科学の世界へ影響を及ぼす事態が今後なくなるように訴えた。

### 3. チェルノブイリ原発事故の処理

ワレリー レガソフの名が世界のマスコミの話題にのぼるようになったのは、彼が有能な核物理学者として、客観的、良心的にチェルノブイリ原発事故の事後処理の責任者とし精力的に働いたからである。

あのいまわしいチェルノブイリ原発の重大事故（1986・4・26）が発生するやソ連政府はレガソフに事故原因の調査と事後処理を命じた。

レガソフはヘリコプターで5度も6度も事故現場上空を飛び、決死で消火に当たっている消防士達に対し深い感謝の言葉を述べたが、消防士達と同じく彼も相当な被曝を受けたものと思われる。当時のモスクワのマスコミの噂さはまさにそうしたものであった。

レガソフは4月27日自殺した。彼の死後発表された報告書の中で、レガソフの事故原因に対する見解がプラウダによって公表された。これもベレストロイカのおかげで、例えばアフガニスタン侵入時のソ連なら当然、握りつぶしていたに違いないだろう。それは、「長い間、わが国で行れてきた間違った経済管理の頂点」としてチェルノブイリ事故を位置づけたものである（Science Vol.240, P.1402, 1988）。という厳しいものであった。

レガソフは、かつてアメリカの科学者達がソ連原発の制御システムが不適当で、多様にわたる事故が何時でも起る可能性あることを指摘していたにも拘らず、ソ連の如何なる公式機関もこれを採上げようとはしなかったと批判している。

彼は6th WHEC（1986）がウィーンで開催された時は事故処理のため参加できなかったが、WHECと相ついで行われたIAEA（国際原子エネルギー機関）主催の「チェルノブイリ原発事故の原因」についての国際会議へは部下をつれて参加し、オープンな態度で終始科学者らしく発言し、西欧側の人達に大きな信頼感を抱かせた。彼は科学的にみて「今回の事故は個人的な責任感の欠如による操作ミスが直接の要因になった」と結論している。

こうした直接の要因とは別に、「電力省の指導者やチェルノブイリ原発の支配人も、Consistencyの概念に欠けており、危険についての警告も無視し続けてきたのだ」と述べて、正義の怒りをぶちまけている。

ゴルバチョフ書記長が自ら異例の追悼の言葉を述べたのが、彼へのせめてものはなむけであろう。

### 4. 7th WHECの幻の会議議長

レガソフがソ連代表のIAEA理事である以上、ソ連でWHECが行われる時はその議長に擬せられることは当然であった。日本での3rd WHECの次に4th WHECをソ連で、という声もあったが、のびのびで、遂に1988年に7th WHECがモスクワで実現の運びに至った。当然、レガソフが議

長になると思っていたが、ソ連側の強い力で、彼は副議長を務めることになり、それでも喜々として会議の準備を進めていた。

私に対しても数回通信をよこし、日本の水素エネルギー開発の現況に対し、レビューするようにという要請をされた。9月は大学を抜けられないので、本学の田川教授を代理で出席さす旨返事すると。すかさず謝意を表して返事をくれるという誠実さであった。

彼の最後の手紙は4月12日付であり、私は彼の死を報ずるタス通信と前後して、この手紙を見たのである。

私の想像するところでは、レガソフにとっては水素エネルギーこそが、彼の理想にマッチして唯一の楽しい仕事になっていたのではなかろうか。

14年前のコンフェランスで出会い、その後、文通ではあったが、幾つかの「大事件」を共に生きた友人、そして終に再びは相まみえることのない純朴の科学者ワレリー A.レガソフに、いま、つきない哀悼の思いを捧げるものである。(1988.8.9)